



TITLE:

<批評・紹介> 梅原末治・藤田亮策
編著「朝鮮古文化綜鑑」

AUTHOR(S):

岡崎, 敬

CITATION:

岡崎, 敬. <批評・紹介> 梅原末治・藤田亮策編著「朝鮮古文化綜鑑」.
東洋史研究 1948, 10(2): 134-136

ISSUE DATE:

1948-05-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138871>

RIGHT:

梅原末治、藤田亮策編著

朝鮮古文化綜鑑 第一卷
樂浪前期

昭和二十二年一月、養徳社刊、A4判

本文九〇頁、圖版五〇葉、價三〇〇圓

古代の遺物の目録、またはコルパス（集成圖）の作製が考古學の研究にとつていかに大切なものであるかはあらためて申すまでもなからう。それが一國の古文物を時代を追ひ、系統的に配列されて來ると、考古學の窓から見た一國の歴史がパノラマとして展開して來る。零細な文獻、時には文獻すら欠いた曖昧模糊たる雲煙の中にかすんでゐた、その國古代の相が、當代に生存してゐた民衆の考古學的遺品によつて一つのうごきとしてくみあつて來るのである。

朝鮮において、このころみはかつてみごとに實現されたことがあつた。それは關野貞博士を中心として刊行せられた『朝鮮古蹟圖譜』全十五冊である。博士は建築史の専門ではあつたが、廣い視野をもたれた方で、古建築、古美術の外、古墳墓の如き考古學的遺蹟遺物も調査されてこれに加へ、半島の史蹟、古文物の研究に一大基礎を與へられたのである。

博士は主として明治の末から大正の中葉に實際に活躍せられたのであるが、そのあとをうけて、黒板・濱田・原田諸博士、又本書の著者による調査がつづけられ、更に古蹟研究會の設立をみて、その調査研究にたゆみがなかつた。殊に東亞全般に及ぶ考古學的調査の隆盛と共に、たゞに半島に於ける這種研究は一國、一地方にとゞまらず日本を含む東亞古代の究明に重大な意味をもつて來たのであつた。今次の綜鑑はこの結果を録する第二の結集とも稱すべきものであつて、資料には周到な手つきと解説を加へ、更に綜説を以て全體を要約してゐる點は學術自身の上からいつても、一般普及の使命からいつても、現日本考古學界の代表的著作たるを失はないものと思はれるのである。

『朝鮮古蹟圖譜』では漢代樂浪郡の遺蹟よりはじめられた。

これは當初史前關係遺蹟は烏居龍藏博士があたられ、史蹟は主として關野貞博士がこれを分擔されたが、關野博士は先づ史上に重要な地點——たとへば郡縣の遺蹟、首都——から逐次調査せられたので、その方針が『古蹟圖譜』にも如實に反映してゐる。ところが銅劍銅鉞類を一つの型とする古文物が漢樂浪郡設置以前、一部には後まで行はれたことも知られて來たが、ともかく漢代文物の波及より以前の半島のものであることが知られるやうになつて來た。大正十四年に梅原、藤田兩教授及び小泉顯夫氏によつて公にされた『南朝鮮に於ける漢代の遺蹟』大正十一年度古蹟調査報告は當時までのこの種の遺物を概括せられた好著であつた。ところが、この報告のかゝれた大正の終り

からの二十年は、日本内地にあつても考古學的發掘調査が一般化して銅劍銅鉞類の屬する文化期が土器様式の上から組立てられ、又日本の大陸進出に伴ひ、滿鮮各地から新資料を加へ東亞古文物の研究の進歩から、年代觀、系統觀について、多くの論攷をみたのであつた（梅原教授『朝鮮古代の文化』四金屬器使用初期の文物（註）參照）。かくして本『綜鑑』がこの時期に『樂浪前期』なる名稱を與へこゝよりはじめたことはまさに百尺桿頭に一步をすゝめたと申すべきである。

同じ著者による『南朝鮮に於ける漢代の遺蹟』と『綜鑑』樂浪前期をくらべてみると、この二十年間の著者の努力、學界の進歩がひし／＼と感ぜられ、いかに多くの明確さを加へたかよくわかる。たとへば先づ第一に明刀錢發見に關する事實である。これは中國古文物が半島に波及した時期を推定するのに重要な資料であつて、更にその分布から南滿洲渾河の流域から佟家江流域に出で、朝鮮禿魯江流域に達するといふ具體的な文化傳播の徑路を想定することになつた（藤田教授『朝鮮發見の明刀錢と其遺跡』參照）。第二は銅劍銅鉞多鈕細文鏡に關する諸事實である。その後の資料も飛躍的に増大したばかりでなく、前者では内地及び入室里の資料だけで全く疑問視されてゐた多鈕細文鏡も新例を加へ、銅劍・細文鏡共に銘范が發見されて、この地におけるあるものゝ製作が確認されたのである。又銅劍類にあつてその裝着法を示すもの乃至鞘が出土したことも注目すべきものといはねばならぬ。更に銅劍銅鉞出土の遺蹟が明ら

かになつた事實である。全羅北道高興郡豆原面雲岱面所在の支石墓からその撐石下箱式棺内より細形銅劍が発見され、又樞本龜次郎氏によつて調査を見た慶尙南道金海邑會岾里貝塚壙棺下より二個の銅劍、七本分の銅製尖頭器が出土した如きである。將來これまでの遊離して論じられた遺物を更に遺蹟の問題として調査しなほす必要が考へられ、殊に箱式棺、壙棺は内地にも系統を存する墓制であつて、きはめて興味あるものといはねばならぬ。(梅原博士「日鮮滿史前末期の墓制に就いて」) 第三は鐵製品出現に關する事實である。前者では入室里發見の銅鉾に附着した鐵鎗や、鐵斧頭、鐵劍片を數へるに過ぎなかつたものが、平安南道渭原郡崇正面龍淵洞(鐵製鉾、鐵製斧頭、鐵製鐵頭、鐵製鋤頭、鐵製鎌、鐵製庖丁、鐵製尖頭器、鐵製鐵、平安南道大同郡龍岳面上里(鐵劍、鐵戟、鐵鉾、鐵斧、鐵製馬具)平壤附近(鐵劍並鞘金具)等より多種多様な完形品を出土、あるものは石器と、あるものは銅製のものと相近い形態をもつておるのである。たゞ渭原出土の鐵斧頭、鐵鎌を鍛造と記し(十五

頁、鐵庖丁と同じつくりで鑄造と考へる方がいゝと思はれる)、又平壤附近出土鞘金具附鐵劍を決しがつとして保留されてあるが、西方亞細亞古王圖のアキナケスに類似したものであるといつてをられるのも、(六八頁)もつと説明が要ると思ふ。

以上の新資料に、現下東亞考古學の全體よりみた綜説を加へておられる。ことに銅劍銅鉾の類のもとづくところを中原漢民族の文物とし、又北方系文物の影響を指摘せし如き遺物各個の

系統論については傾聴すべき所少くない。一二の希望をのべれば、銅劍類と密接な關係にある磨製石劍類の各形式の代表的なものをも資料に收めていたゞきたかつたし、又地名理解の爲に地圖が附録として、少くも綜説の中にでもほしいやうにおもはれた。

終戦の結果、日本人の手になる朝鮮古蹟調査事業が終結をづけ、その總決算が現下の困難な狀勢の下にあつて、近頃みることの出来ない豪華な裝幀の下に刊行せられたことは、我が學界の爲にも又新生朝鮮國の爲にもよるこびにたえないところであり、續刊がつゝがなく完成することを希望し期待するのは、たゞに私共にとゞまちないと思ふのである。なほ梅原教授が本書と相前後して「朝鮮古代の文化」「朝鮮古代の墓制」の二書を世におくられ、それが充分に本綜鑑の手引となつてゐることも併せて記しておかう。

〔岡崎 敬〕